園の隠れたカリキュラムと保育者の意識[1)]

青　野　篤　子

要約：本研究の目的は，子どものジェンダー化を推進する主要な担い手（エイジェント）として保育と幼児教育に焦点を当て，子どもをとりまく物的環境と人的環境に潜んでいる隠れたカリキュラムを明らかにすること，そして，保育者に対するフィードバックを通して，隠れたカリキュラムに対する意識化を促すとともに，それに対する態度を把握することであった。その結果，以下のことが見出された。物的環境として，衣服や持ち物，表示物における男女の色分け，人的環境として，保育者の働きかけや園児同士の相互作用における男女差が認められた。園関係者からは，性別を教える必要性，性差を把握する必要性も指摘されたが，単に習慣から行われている不必要な区別と言えるものもあった。次に，創作活動や遊びにおいて男女の興味関心にいくらかの差異が見られたが，保育者はそれを自然の姿として認める傾向があった。男性保育者の参入が進んでいる園でも，男性保育者の仕事・保育内容は女性保育者と異なり，乳児の世話は困難だと思われていた。このような結果をふまえ，黙示的な隠れたカリキュラムを是正するためのプログラムが必要であることが論じられた。
［キーワード：ジェンダー・フリー教育，ジェンダー・フリー保育，隠れたカリキュラム］

男女共同参画社会を実現し男女平等を達成するためには，次世代の育成がきわめて重要である。2007年の世論調査（内閣府，2007）で，日本では初めて「男は仕事・女は家庭」という性別分業の役割分担に対する反対が賛成を上回った。しかし，「子育て」は女性の側に負担が大きくのしかかっており，その結果，女性が子育ての主体となることによって次世代の母親業を再生産している（青野，2007）。また，子育ての社会化が進む中で，やはり保育や幼児教育の仕事が主に女性によって担われていることも，性別分業を補強するのに一役買っていると言えよう。このような子育て環境を背景として，子どものジェンダー化には数多くの要因がかかわっている。ジェンダー・ステレオタイプはすでに2，3歳の頃から習得され始めるため，とりわけ子どもが幼少期に集団生活を送る保育所や幼稚園の環境が大きな意味をもっていると思われる。

学校教育とは異なり，保育や幼児教育は公式のカリキュラムによって縛られることが少ない反面，制度化されず明示的でもない隠れたカリキュラム（hidden curriculum)が多く存在する。隠れたカリキュラムとは，保育や教育において，表だって教えられ，語られることはなく，暗黙のうちに園児や生徒に伝えられる規範・価値・信念の体系である。氏原（1996）によると，隠れたカリキュラムには，教室での性の配分，知識の配分，教科書，学校組織のあ

り方など「明示的な」隠れたカリキュラムと，教師－生徒の相互作用や生徒間の関係のような「黙示的な」隠れたカリキュラムがあるとされる。保育・幼児教育に関しては，前者の例としては，名簿による男女の名前の順序，トイレのスリッパ，名前シールの色と絵柄，カバンの色，靴箱の並びなど，いわゆる物的環境における性別区分，後者の例としては，保育者から子どもへの働きかけや子ども同士の相互作用など，いわゆる人的環境における男女差をあげることができる。

隠れたカリキュラムが子どもたちにどのような影響を及ぼすかについての心理学的研究はほとんどないが，吉武（2006）は，「心理学的線引き」という概念を用いて男女別名簿の問題を考察している。彼女によると，男子が先・女子が後かというよりも男女を区別するということがまず問題だとし，内集団ひいきと外集団に対する差異性の認知を活性化させ，原因帰属や対人評価に影響を与えるとしている。

このような隠れたカリキュラムと，その背後にあるジェンダー・バイアスを是正し，教育（保育）を男女平等なものにしていこうという取り組みがジェンダー・フリー教育（保育）である。金子・青野（2004）によれば，ジェンダー・フリー教育（保育）とは，学校現場など教育の場そのものを平等なものとするとともに，授業などを通してより積極的に性差別を解消していく取り組みであり，学校教育における平等と学校教育を通しての平等の達成を含むものだとされる。また，Huston(1985)は，男女平等教育を進める上で不可欠な視点として，ジェンダー・センシティブの概念を提唱している。すなわち，ジェンダー・フリーの教育というとき，教育事象に関する性別区分をなくすことによってジェンダーを解消しようとする努力も必要であるが，これはジェンダーの存在に気づかない(gender blindness)の状態を生み出す可能性があり，ジェンダー・バイアスに敏感(gender sensitive)になりジェンダー・バイアスを除去していくことが必要だというのである。ジェンダー・フリー教育（保育）は，男女を形式的に同じように扱うことではなく，幼児期にすでに作られている性差を是正するための男女別の働きかけをも含み，実質的な男女平等を実現するものだという認識が必要である。

日本では，1990年代後半からジェンダー・フリー教育（保育）の名のもとで教育や保育の見直しが始まった。その代表的なものとして，山梨県立女子短期大学ジェンダー・フリー教育プログラム研究会(2002)の取り組みがあり，保育環境の見直しや保育者と保護者の意識啓発，保育者養成プログラムの開発まで，大学・現場・自治体の連携のもとで地道な努力が続けられている。このような先進的な取り組みに触発されてジェンダー・フリー教育が少しずつ進んでいたが，2000年前後からいわゆるジェンダー・フリー・バッシングも激しさを増してきた（木村，2005など）。

バッシング派は，男女同室での着替えや男女混合名簿，男女一緒の競技などを具体的な攻撃目標とし，政府によるジェンダー・フリー教育への介入も引き出した（同室着替えなどに

ついての全国調査，ジェンダー・フリーの語の使用自粛の通知)。筆者が訪問したある新築の保育所では，トイレは完全に男女別に分かれ，ドアもピンクとブルーに色分けされ，あらかじめ批判を避けているかのようであった。青野（2007）の調査では，幼児段階では身体的な性差もほとんどないのでトイレは一緒でよいという意見，あるいは，男女の違いを知るためにも保育所のトイレは男女一緒でよいという意見が多数を占めていた。従って，バッシング派の批判は現場の実態やニーズを無視した主張だと言える。また，バッシング派は，ジェンダー・フリーは男女の区別や性差をなくそうとする危険な思想だという主張を繰り広げ，擁護派からは，ジェンダー・フリーは性差を否定するものでないとの弁明を引き出し，ジェンダー概念そのものにも揺さぶりをかけている（イダ，2007；青野，印刷中)。

男女平等をめざすジェンダー・フリー教育（保育）の取り組みを絶やさないためには，ジェンダー・フリー教育（保育）についての理解を促すとともに，ジェンダー・フリー教育（保育）の効果を検証し，それを世の中に訴えていく必要があるだろう。しかし，これまでの研究は，教育（保育）現場の現状をジェンダー・バイアスの観点からとらえたものが主流であり，現場への介入はほとんど行われてこなかったと言える。また，ジェンダー・フリー教育（保育）の実践がなされても，その効果について査定した研究はほとんどなされていない。そこで，筆者は，保育現場の現状をジェンダー・バイアスの観点から分析し，それぞれの園の実態やニーズに即した具体的なジェンダー・フリー保育のプログラムを園関係者とともに考案し，それを導入し，その効果を査定するという一連の研究を進めている。

本研究はその一部として行われた。具体的には，ジェンダー・フリー・プログラム立案の一助として，保育所・幼稚園の物的環境における性別区分と，人的環境としての保育者から男女児への異なる働きかけや園児同士の相互作用に見られる性差を分析し，その結果を園にフィードバックし，それに対する園側の意見を把握しようとしたものである。

方法

1. 協力園の選定

2006年5月に福山市内の法人立の保育所44園，幼稚園20園の園長または責任者に郵送にて，ジェンダー・フリー教育（保育）の導入状況，ジェンダー・フリー教育（保育）に対する重要性をたずねるとともに，研究のための観察やデータ収集の協力を依頼した。このうち，保育所8園（回収率18%)，幼稚園9園（45%）から回答があった。これらの園のうち，ビデオ撮影を含む環境調査に協力してくれたのは2幼稚園，5保育所に対して園の環境調査を依頼した。

2. ビデオ撮影の方法

(1)研究参加者（園児と保育関係者）の人権とプライバシーが侵害されることのないように，調査の実施から結果の公表に至るまで十分配慮することをあらかじめ園長に対して説明し了解を得た。

(2)園長の了解を得た上で，園児を取り巻く物的環境（園の備品・用具・教材・玩具，子どもの持ち物や服装など）と人的環境（保育者から園児や集団への働きかけ，園児の遊びや活動など）を，それぞれの園の事情やスケジュールを参考にしながら，保育活動の妨げにならないように少し離れた場所から録画した。2006年７月～9月の間に，1つの園に対し2,3日程度，大学生が2名ずつ園を訪問して撮影を行った。

3. 録画内容の分析

録画されたすべての内容を大学生2名が視聴し，物的環境と人的環境における男女の区別や区分，男女別の働きかけ，子どもの活動に見られる男女差が見られる点と見られない点について，2人で相談しながら記録した。園によって撮影場面が異なるので，男女差について言及された側面は園によって異なる。

4. 園へのフィードバックと園からの意見聴取

録画内容を，できるだけ多くの場面をかつ重複がないように各園15分程度に編集し，園へのフィードバック用DVDを作成した。また，物的環境と人的環境について，男女差が見られなかった点，男女差が見られた点をA4一枚のシートにまとめた。これらを園に持参し，園長や保育者に視聴してもらい，感想や意見を聴取するとともに，こちらの質問に回答を求めた。園へのフィードバックは2007年2月から3月にかけて行った。各園で約1時間のミーティングをもった。A・E・F園には園長個人に対して，B・C・D園には園長と保育者（参加可能な人のみ）に対してフィードバックを行い，それぞれ意見をもらった。残りの1園に対しては調整がうまくいかず，フィードバックを十分に行うことができなかったため，分析からは除外した。

結果

園ごとに，①園の概要（環境，受け入れ園児の年齢，保育者数（本稿では，保育士と教諭を合わせて保育者と呼ぶことにする），ジェンダー・フリー教育（保育）に対する園長の考え），②園へのフィードバックの内容，③園からのコメントを列挙する。③については，園によってミーティングの形式が異なっていたので，結果として得られたコメントも質量ともに異なることを断っておく。

(1)A幼稚園

①園の概要

交通量の多い道路に面しているが，園舎は平面的で園庭も広く鯉の池や野菜のプランターなどがあり，自然に触れ合うことを大切にしている印象を受ける。園長は女性。保育年齢は3歳児～5歳児，保育者の数は女性11名，男性0名。ジェンダー・フリー保育は非常に重要であり，園でも積極的に進めていると考えているとのことであった。2006年9月7日，10日，11日の3日間にわたり，合計3時間半のビデオ撮影を行った。撮影日には，運動会のお遊戯練習を

教室の中，外の両方で行なっていた。

②園へのフィードバックの内容

1)男女差があまり見られなかった点

- ロッカーのネームラベルの色はクラスの色で，男女で統一されていた。
- 靴箱のネームラベルの色はクラスの色で，男女で統一されていた。
- 手を洗うとき，男女で分かれることなく，空いたところに行くようにしていた。
- 男女が入り交じって，室内で工作を行っていた。
- 男女混合で円陣を作り，リズム遊びを行っていた。

2)男女差が見られた点

- 室内に展示されている絵のネームラベルが，女児はピンク，男児は青だった。
- 水筒，お弁当箱の色としては，女児は暖色系，男児は寒色系が多かった。
- 男児同士でふざけあっている光景が見られた。
- 女児，男児それぞれが同性同士でかたまる場面が見られた。
- 外での整列では，男女別に二列に並んでいた。
- 女児には「～ちゃん」，男児には「くん～」という呼びかけがなされていた。
- 徒競走の練習のとき，年少では男女一緒だが，年長では男女別で走っていた。

③園からのコメント（園長）

- 髪の長い女の子がめだつことについて，活動には不向きであるが，家庭（親）の意向や子どもの好みの現れだろうとの意見であった。
- 外で男女別に並ばせている理由をたずねたところ，自分の場所を理解させきちんと並ばせるためとのこと。とくに入園当初の3歳児などでは，自分の性別もわからず，みんなばらばらに動くため，集団としてまとめるために男女別にしているとのことであった。
- 壁に飾ってある絵の名前ラベルが男女別に色分けしてあることについても，子ども自身や絵を見る保護者が性別により自分の絵を見つけやすくしているとのことであった。
- 徒競走で年少は男女混合で年長で男女別にしている理由をたずねると，年長で一部性差が現れてくるので，差が開かないように配慮しているのだという。
- 男性教諭を雇用する計画はないかたずねたところ，小さい子どもの世話や気配りの点で女性の方が適しているし，女児の排泄の世話などは男性では問題もある。中学生や高校生の男子の実習生も来るが，それを見るにつけ，男性には細かいことへの気配りができないと感じている（本人たちは非常にがんばっているし楽しんでいるが）。また，親もやさしい女性の先生を希望しているように思うとのことであった。
- どういったところに性差を感じるかとの質問に対して，年少ではまったくと言っていいほど性差は感じられないが，年長ではかなり遊び方や性格面で性差が見られるようになる。平均的に男児は活発，女児はおとなしくなる。3歳くらいで男児は乗り物への興味

が強くなり，遊び場でも乗り物で競って遊びたがる。それに合わせ，お遊戯会の出し物や使用する音楽も，男児・女児が好むものを準備するようにしている（男児は白虎隊を演じる，女児は振袖を着るなど）とのことであった。

- 女の子が白虎隊をやりたいとか，逆に男の子が女の子の踊りをしたいというような希望はないのかたずねたが，ないとのことだった。しかし，お遊戯会が終わった後は，小さい子が大きい子のまねをしたり，男女がいっしょになって踊ることもあるのだという。

(2)B保育園

①園の概要

閑静な住宅地の中にあり，自然環境には恵まれている。園長は男性。副園長（女性）の話では，古い民家もあり，副園長の話によると，保守的な土地柄でもあるとのことであった。内部はカラフルな家具が多く置かれていた。保育年齢は 0 歳児～5 歳児。保育者の数は女性 22 名，男性 0 名。ジェンダー・フリー保育は重要であり，園でも積極的に進めていると考えている。しかし，男性と女性では，元々体のつくりや特性が大きく異なるため，行き過ぎたジェンダー・フリーには反対であるとのことであった。2006 年 7 月 25 日，8 月 10 日，8 月 11 日にわたり，合計 2 時間半のビデオ撮影を行った。撮影日には，保育者による絵本の読み聞かせなど，室内での活動を主に行なっていた。

②園へのフィードバックの内容

1)男女差があまり見られなかった点

- ロッカーの箱は黄色い中性的な色が使われており，プラスチックの道具箱はすべて水色であった。
- 鞄置き場，靴箱に貼ってあるシールはクラスによって色の違いがあるものの，男女で違いはなかった。また，並び方も男女混合であいうえお順であった。
- 展示をしている絵の台紙の色は多数あり，園児の自由にまかされているようであった。
- 玩具はぬいぐるみ，ブロック，ままごとセットなどが多かった。
- ビニール・プールでは男女いっしょに遊んでいた。
- 昼寝をする場所は自由で，敷き布団はみな青色だった。

2)男女差が見られた点

- トイレのスリッパは，小さい子用はすべて黄色，大きい子用は青，黄，ピンクの三色であった。
- 水筒，鞄，タオルの色は，女児は暖色系，男児は寒色系がめだった。ただし，戦隊物の影響，赤が好きな男児もいた。また，描かれているキャラクターも女児はキティちゃん，男児はトーマスなどがめだった。
- 男児の子の方が，保育者によく注意されていた。
- 女性保育者は，ピンクのエプロンを身につけていた。

・ 女性保育者がふざけている男児の背中を叩いて注意するなど，男児の世話に手を焼いているようだった。
・ おやつの時に男女混合の席であるが，同性同士でかたまる傾向が見られた。

③園からのコメント（副園長と保育者の一部）

・ もっと保育のことなどを勉強してから来て欲しい。
・ 色分けは男女ではなく，クラス別。
・ 男女のこだわりはないという意識で，やっている家庭にまで口出しはしない。
・ 男性らしさ，女性らしさよりも，個々人のアイデンティティを大事にしている。
・ 保育者がピンクのエプロンをしているのはたまたまである。
・ 断片的なものではなく，もっと長期的に見れば気づく点も多いと思う。
・ 園児の年齢によって様子も大きく変わってくるので，年齢ごとに観察して分析するべきではないか。

(3)C保育所

①園の概要

田園地帯にある。建て替えたばかりの園舎は木造であり，家具や遊具も木製のものが多かった。園長は女性。積極的に男性の保育者を受け入れている。保育年齢は0歳児～5歳児。保育者の数は女性46名，男性3名。ジェンダー・フリー保育は重要であると考えてはいるが，ジェンダー・フリーが具体的にどういったものかわからず，進展状況については何とも言えないとのことであった。撮影は2006年7月4日，11日，8月7日にわたり，合計5時間のビデオ撮影を行った。撮影日には，プール遊びや室内での遊戯を，クラスごとに交代で行なっていた。

②園へのフィードバックの内容

1)男女差があまり見られなかった点

・ お遊戯の時，男女入り混じって2列に並んでいた。
・ 0～2歳児の衣類の箱には，男女ともに動物のラベルが貼られていた。
・ 女児だけでなく男児にも髪の長い子がいた。
・ 女児はスカートの子も少数いるが，大半はズボンをはいていた。
・ 保育者服装にはとくに男女差は見られなかった。

2)男女差が見られた点

・ 女児は暖色系，男児は寒色系の服を着る傾向が見られた。園児数が多いのでとくにどの印象が強かった。
・ 昼食の配膳の時のトレイの色は赤・青の2色で，女児は赤，男児は青を選ぶ傾向が見られた。
・ お遊戯の時，女児が，ふざけている男児を注意していた。
・ 女性保育者より男性保育者の方が，動作がやや荒く感じられた。

- 女性保育者と男性保育者が1つのクラスを受け持っている場合は，男性保育者の方が主導的な立場をとっているように見えた。
- 昼食の時の給仕は主に女性保育者が行なっていた。男性保育者はエプロンをしていなかった。
- 男性保育者は女性保育者に比べてやや厳しい叱り方をしているように感じられた。
- 女児より男児の方が保育者からよく注意を受けていた。
- 女児には「～ちゃん」，男児には「～くん」という呼びかけがなされていた。
- 乳幼児（0～2歳児）の保育は主に女性の保育者が行なっていた。

③園からのコメント（園長と保育者全員）

- スポーツの好みはテレビによる影響が大きい。女児の中にもサッカーが好きな子がいる。
- 男性保育者はふだんからエプロンを着用する習慣が身についていないので，園でもつけない人が多い。
- 男児の方が元気のいい子どもが多いので注意する機会が多いが，男女関係なく同じように注意しているつもりである。むしろ子どもの性格によって叱り方を変えている。
- サッカーなどの体を動かす遊びでは，園児は自然と男性保育者の周りに集まる傾向がある。
- 女児には乱暴な言葉づかい，男児には暴力的な行動に対して注意することが多い。
- 現在のところ乳幼児のクラスの担当は女性保育者に限定しているとのことであった。

(4)D保育園

①園の概要

住宅地の中にあり，花が飾られ清潔感のある園舎である。職員室は開放的で園児や保護者とのコミュニケーションがとりやすい印象を受ける。園長は女性。保育年齢は0歳児～5歳児。保育者の数は女性25名，男性0名。ジェンダー・フリー保育は非常に重要であると考えてはいるが，ジェンダー・フリーが具体的にどういったものかわからないため，進展状況についてはなんとも言えないとのことであった。2006年7月26日，8月8日，9日にわたり，合計2時間のビデオ撮影を行った。撮影日には，室内でお遊戯や，外での砂遊び，プール遊びを行なっていた。また，8月8日には，園児全員を集めて平和集会を行なっていた。

②園へのフィードバックの内容

1)男女差があまり見られなかった点

- 道具箱は，山吹色，黄色，青，ピンクなどさまざまであった。道具置き場のラベルはすべてピンク色だった。靴箱も全員がピンクのラベルと動物のイラストで男女差は見られなかった。
- 誕生日の日付を記した壁掛けは，サボテン，ニワトリなどをモチーフにしており，男女混合で記されていた。

- トイレのスリッパは，水色，赤，緑の3色であった。
- 赤い服は男女ともに好んでいるようであった。
- アンパンマンは男女ともに人気のようだった。
- 女児も男児もパンツ姿で砂場遊びをしていた。
- 女児・男児がいっしょにブロックで遊んでおり，使用するブロックの色に男女差はないようであった。
- シャボン玉に男女ともに興味を示し，いっしょに追いかけていた。
- 宇宙の絵を描く場面で，男女ともに黒を背景にロボットを描いていた。ひまわりの貼り絵にも男女差は見られなかった。
- 男女ともに亀に興味を示し，触って遊んでいた。ザリガニを怖がる男児もいた。
- 男女児がいっしょにイスを運んでいた。
- 手を洗う時は，男女が混じって並んで手を洗っていた。
- 保育者の話を聞くとき，男女入り混じっての円陣になっていた。集まりの時は，男女混合で並んでいた。

2)男女差が見られた点

- プールバッグの色は，赤は女児，青は男児，黄色はどちらにも見られた。コップの色では，男児に青，緑色がめだった。洋服は女児は暖色系，男児は寒色系が多いようだった。
- 男児が黒いクレヨンで紙を塗りつぶしていた。
- 砂場遊びをするのは男児の方が多かった。
- 平和集会で意見を求められ発表しているのは主に女の子であった。
- 連絡帳返却時，男児の方がそわそわして落ち着きがないようだった。
- グループに分かれて工作するとき，男女で分かれて着席する傾向も見られた。
- 工作の時，男児の方が保育者によく質問していた。
- 絵本を読んでもらうとき，女児はおとなしくしていたが，男児はそわそわと落ち着きがないようだった。

③園からのコメント（保育者4名）

- 園児の運動機能を重視するため，女児にはなるべくスカートを着用させないようにしている。基本的には，男女とも年間を通して短パンを着用するように保護者にもお願いをしている。
- 以前に「あるクラスは赤，もうひとつのクラスは青を使う」というようにクラス別にスリッパの色を決めたことがあったが，園児に色へのこだわりは特にみられなかった。
- 道具箱は自由にしている。園で一括して注文するときは黄色にしている。
- 3歳くらいでは男女ともままごとが好きで，男児でも進んでピンクのエプロンを着用する場合がある。

・ （平和）集会で意見を求められたときには男女とも積極的に発表している。
・ 家庭で「男の子だから・・・」と言われている子は，他の男児をそのように見る傾向があるようだ。
・ 男性保育者が参入することについて意見を求めると，男性・女性に関係なく子どもが好きで，保育を仕事としたいのであれば，同じ保育者仲間としてうまくやっていけると思うというコメントがあった。

(5)E保育園

①園の概要

立地条件を活用して起伏のある園庭を意図的につくり，園児のダイナミックな活動を促進している。園長は女性。保育年齢は0歳児～5歳児。保育者の数は女性16名，男性0名。ジェンダー・フリー保育は非常に重要であると考えており，特に意識はしていないが，ジェンダー・フリー保育は進んでいると思っているとのことであった。2006年8月7日，9日にわたり，合計3時間のビデオ撮影を行った。撮影日には，蝉取りに出かけるなど，野外での活動を積極的に行なっていた。また，室内では園児たちが楽しそうに絵を描いていた。

②園へのフィードバックの内容

1)男女差があまり見られなかった点

・ トイレにはスリッパがなく，直接靴で入れるようになっていた。
・ あるクラスのタオル吊りは，名前のラベルは全部が緑色で，ラベルの下に動物や昆虫のシールが貼ってあった。
・ お絵描きのとき，男児がピンクやオレンジ，女児が緑など，みんなそれぞれ好きな色を使っていた。
・ 女児も男児も一緒になって蝉に触っていた。
・ 昼食のとき，女児も男児も一緒になって配膳のお手伝いをしていた。
・ お遊戯のとき，男女一緒になって一列に並んでいた。

2)男女差が見られた点

・ タオルやプールバッグなどで，女児は暖色系，男児は寒色系が多いようだった。
・ お遊戯のときに，男女別で一列ずつに並ぶ場面があった。
・ お遊戯のとき，女児同士，男児同士で手をつないでいた。
・ 男児同士がふざけあっている場面がよく観察された。
・ 成長の記録の名前が，女児は赤，男児は緑になっていた（順番は男女混合）。

③園からのコメント（園長）

・ 他では男女別の色分けがないのに成長記録の表だけが男女別（女の子は赤，男の子は緑）になっている理由を聞くと，身長や体重などの統計が男女別になっていることが多く，それと比較しやすいように男女で色を分けているとのことだった.

- 絵画指導に力を入れておられる園のようであったので，男女差への配慮はないかたずねると，絵は教えるものではなく，子どもが気持ちを表現するものだから，できるだけ自由に書かせて介入的な指導はしないとのことであった。
- 女性保育士と男性保育士の役割の違いについてたずねると,）男性保育者は子どもにダイナミックは遊びを教えることができるが，その他は男女でほとんど違いはないとのことだった。

(6)F保育園

①園の概要

郊外の新興住宅地の中にあり，同系列の幼稚園と協力体制にある。園長は女性。保育年齢は0歳児～5歳児，園児数は120名，保育者の数は女性20名，男性1名。ジェンダー・フリー保育は，非常に重要であると考えており，園でも積極的に進めているとのことであった。2006年7月27日，8月11日，22日にわたり，合計4時間半ビデオ撮影を行った。撮影日には，プール遊びや，室内でリズムに合わせたお遊戯を行なっていた。

②園へのフィードバックの内容

1)男女差があまり見られなかった点

- 絵の名前のラベルは全員ピンクであった。
- 服を入れるかごには動物の絵が貼ってあり，男女差は見られなかった。
- １歳児のクラスでは，プールのとき男女一緒に水浴びしていた。
- プール遊びでは様々な色のおもちゃがあり，各自，好きな色のおもちゃを用いて遊んでいた。
- 女児には「～ちゃん」，男児には「～くん」という呼びかけがなされていた。ただし，１歳児のクラスでは，男児に対して「～ちゃん」と呼びかけることが多かった。

2)男女差が見られた点

- 女児の名前はピンクの服を着た女の子の切り絵の上に，男児の名前は青色の服を着た男の子の切り絵の上に書いてあった。
- 男児は，椅子から飛び降りたりするなど，活発に活動していた。
- 絵を描くときに，女児は暖色系，男児は寒色系を多く使用していた。
- 女児には髪の長い子が，男児には髪の短い子が多かった。

③からのコメント（園長）

- 女児を「～ちゃん」，男児を「～くん」と呼ぶことについて意見を求めると，最近は男女の名前が区別できないようになってきたため，「～ちゃん」，「～くん」と呼ぶことで，保育者は男女を区別しやすく，園児たちにも自覚ができるとのことだった。
- 女の子はピンク，男の子は青といった色分けが必要かどうかたずねると，自分は男，女という認識を育てる上で，男女を表すものを使用する必要もある。園児の発達段階や個

人差に応じて，性別を教えることは保育のさまざまな場面で出てくる。たとえば，お父さんとお母さんの体の違いに興味をもって「どうして？」とたずねてくれば，その機会をとらえて，男女の差異を教えることが必要だという意見であった。

・ 女性保育者と男性保育者の違いについては，男性だからということではなく，経験年数がまだ短いということから乳児は担当せず，幼児の担当にしているとのこと。

考察

本研究の目的は，ジェンダー・フリー・プログラムを考案するにあたり，保育環境における隠れたカリキュラムの実態を明らかにすること，そして，保育者にフィードバックすることにより保育者の意識化を促すとともに，隠れたカリキュラムに対するに対する保育者の意見を聴取することであった。ここでは，協力園全体を通して見られた傾向と，ジェンダー・フリー保育を推進する上での今後の課題について考察する。

まず観察された園の物的環境についてであるが，靴箱や道具箱置き場などが男女で分けられた例は今回の調査では見当たらなかった。靴箱や道具箱の置き場の配置は，男女混合の名前順あるいは誕生日順になっているものが多かった。また，園が準備している道具類や日用品にも，色で分けるなどのめだった男女差はなかった。しかし，名前シールや成長の記録，誕生日の表示などの色やイラストが男女で異なる園が一部見られた。園長や保育者のコメントによると，自分の場所をわからせるために性別カテゴリーを利用している場合があること，園児が自分の性別を知ることも成長のプロセスとして必要であるとの認識があることがわかった。園で使用するエプロン，園児の服装や持ち物（手提げ袋，水筒，コップなど）など，家庭から持ち込まれたものには，女子は暖色系，男子は寒色系という違いがどこの園でも見られ，「女の子はピンク，男の子はブルー」という色にまつわるジェンダー文化はかなり根強いものであることが伺われる。ジェンダー・フリー保育が今後取り組むべき課題の一つであろう。また，衣服や持ち物に書かれたキャラクターも男女差が大きく，保護者や園児のジェンダー意識の表れとみることができよう。

次に人的環境についてであるが，今回調査を行なった園では，保育者からの呼びかけは，年長の女児には「～ちゃん」，男児には「～くん」が多くなっていた。このような呼びかけは保育者も疑問に思うことなく自然に行っており，園児もそれに抵抗を示すことはないようだ。また，大きくなるに従って，遊びの場面で女児同士，男児同士に分かれるなど，同性同士でかたまる光景が多く観察された。これに対して保育者が介入することはなく，子どもの自由にまかされていた。また，お遊戯のときに男女別に整列させたり，屋外で同性同士で手をつながせたり，畑の作業を男女別にさせたり，「女の子は・・・」というカテゴリーを用いることにより，男女をグループとして扱う発言や働きかけも多くの園で観察された。このように，

女児・男児のカテゴリー化は習慣的にいくつかの園で行われており，クラスを統制しやすくするための手段となっていると考えられる（金子・青野，2006）。

保育者が園児に対して注意をする場面がいくつか観察されたが，多くの場合は男児がふざけて注意されていた。対照的に，女児がふざけて注意されるという場面はあまり見られなかった。また，保育者が子どもをほめる場面では，女児には「賢い」，「かわいい」，男児には「かっこいい」，「強い」など，ほめことばに違いが見られた。このような保育者の注意の与え方やほめ方の違いは，保育者が女児と男児には行動面で性差があると信じているために，実際には性差がなかったとしても性差を読み取ってしまったり，わずかな性差にも敏感に反応してしまうことから生じている可能性がある。そして，男女児に対する異なる働きかけが男女児に対するステレオタイプや性差をさらに助長することも考えられる。こういった保育者と園児とのやりとりはその場限りのもので形として残るものではないので，黙示的な隠れたカリキュラムの構成要素の一つだと考えられが，そうだからこそ子どものジェンダー化に大きな影響力をもつと言えよう。

幼児期には，認知能力や運動能力にほとんど性差がないと考えられる。しかし，園での創作活動や遊び・運動のなかで興味や行動面における性差や，保育者の異なる扱いが観察されることもあった。ある園では，工作をつくるときに男児の方がよく質問をしている場面が観察されたが，ある種の工作に対して男児の方が興味を強くもっていることが示唆される。男児がより多く質問をすることにより，さらにその方面での興味を強くする結果，男児の能力は伸張し性差は大きくなるであろう。逆に女児が興味をもち，女児が能力を伸ばす活動もあるだろう。別の観察例では，徒競争において，年少児では男女混合であったものが年長児では男女別に行われていた。園長のコメントでは，年長児では性差が現れ始めるためだという。この時期の発達のスピードは個人差が大きく，一部の能力に秀でる園児もいると考えられるが，「男児の方が速い」というメッセージを暗黙のうちに園児に伝えることになるのではないだろうか。

男女児の能力をいかに伸ばすかということも保育や幼児教育の課題の一つだとすれば，この時期の子どもたちには性差よりも個人差が大きいのだと認識し，種々の能力や得意分野についての男女別のステレオタイプを払拭する必要があるだろう。むしろ，ある活動に入り込めない子ども（ときには女児や男児の平均的な傾向である場合もあるだろう）や不得手な子どもに対して積極的な働きかけをしていく必要があるのではないか。子どもの自主性・主体性・自由を尊重することも大切であるが，そもそも子どもが自主的・主体的・自由に選択したと見える活動が，周りの子どものまねであったり，男女のふさわしさにとらわれた選択であったりという場合が少ないと思われるからである。より介入的な働きかけやプログラムを検討していくことが，ジェンダー・フリー保育の重要な課題の一つだと考えられる。

協力園のうち3園に数名の男性保育者がいたが，女性保育者と男性保育者とでは，子どもに

対する叱り方，遊び方などにかなりの違いが観察された。女性保育者は，どちらかというと穏やかでやさしい働きかけが多かった。それに対して，男性保育者はどちらかというと荒々しく，体を使っての働きかけが多かった。また，女性保育者と男性保育者とでは仕事の内容や保育の内容が同じではなかった。すなわち，乳児の世話は女性保育者，園内の力仕事や送迎者の誘導，園児との外遊びは男性保育者という偏りが見られた。いずれの園長の話でも，男性保育者がいることは望ましいが，女性保育者とまったく同じ担当にすることには抵抗があるようであった。ある園では，男性保育者の乳児を担当したいという意見と，園長の時期尚早であるという意見が対立している様子がうかがわれた。男性保育者の参入をめぐっては，中田（2004）の論考や青野・玉木（2007）を参考にしていただきたい。男性の子育て参加が強調される時代になってもなお，保育や幼児教育の現場において女性が主たる役割を担っていることは大いなる矛盾であり，男性の参入により保育や幼児教育の質的転換，給与などの労働条件の改善が大いに期待される。

本研究は，園に対して園の実態を伝え，さらにそれに対する園の意見を聞くことを意図していたが，研究者が高所からいわゆる「ジェンダー・チェック」を行っているという印象をぬぐい切れず，ある種の緊張関係をはらんだものであった。研究を進めるにあたり，園長だけでなく様々な立場の園関係者へのインフォームド・コンセントの必要性を痛感させられた。しかし，現場の率直な意見を知ることは本研究の収穫であった。たとえば，ある園長とは，男女の区別を教えることの是非については，かなりの時間をかけて話しあった。園長は，男女の区別を教えることは性差別や性役割の押しつけとは別問題で，子どもが自分を知るうえで必要なことだという持論を披瀝された。園長の意見は，昨今のジェンダー（・フリー）議論の核心とも言えるもので，学者の間でも議論が分かれるところである。筆者は，個人の認識は多面的であり，性別の認識が優先されるべきものとは考えない。このジェンダー化された社会で，ほうっておいても子どもは性別の認識を身につけるのであり，保育や幼児教育の場ではむしろそれ以外のアイデンティティを教えてやってもいいのではないかと思う。

本研究で得られた知見をもとに，今後はさらに協力園の理解と協力を求め，ジェンダー・フリー保育の推進に向けて，具体的なプログラムの立案と実施，その効果の査定まで研究を進めていく予定である。

引用文献

青野篤子（2007）．日本における母性神話と女性の現状　黄自進（編）近現代日本社會的蛻変　中央研究院人文社会科学研究中心（台湾）pp. 39-60.

青野篤子(2007).男女平等とジェンダーに対する保育者の意識　福山大学人間文化学部紀要，7，65-79.

青野篤子（印刷中）．ジェンダー概念の変遷　青野篤子・赤澤淳子・松並知子（編著）ジェンダーの心理学ハンドブック　ナカニシヤ出版

青野篤子・玉木健弘（2007）．男性保育者に対する保護者および保育者の期待　日本発達心理学会第18回大会発表論文集，289.

Houston, B. (1985). Should public education be gender free? In L. Stone(Ed.)1994 *The education feminism reader*. London:Routlege. Pp.122-134.

イダヒロユキ　(2007).「ジェンダー概念の整理」の進展と課題(1)　人間科学研究（大阪経済大学人間科学部），1，49-69.

金子省子・青野篤子（2004）．保育所・幼稚園におけるジェンダーをめぐる課題　愛媛大学教育学部紀要第Ⅰ部教育科学，50(2)，131-139.

金子省子・青野篤子（2006）．ジェンダー・フリー保育に及ぼす保育者・親のジェンダー観の影響　平成15年度～17年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号：15510216　代表：金子省子）研究成果報告書

木村涼子(編)　(2005)　ジェンダー・フリートラブル　白澤社

内閣府大臣官房政府広報室（2007）．男女共同参画社会に関する世論調査（http://www8.cao.go.jp/survey/h19/h19-danjyo/index.html）

中田奈月（2004）．男性保育者による保育者定義のシークエンス　家族社会学研究，16(1)，41-51.

氏原陽子（1996）．中学校における男女平等と性差別の錯綜――二つの「隠れたカリキュラム」レベルから――　教育社会学研究，58，29-45.

山梨県立女子短期大学ジェンダー・フリー教育プログラム研究会（2002）．ジェンダー・フリーで育ちあおう！私らしく，あなたらしく生活思想社

吉武久美子（2006）．学校現場での男女別名簿とジェンダーに関する社会心理学的位置考察　純心現代福祉研究，10，37-46.

注

[1] 本研究は，平成18～20年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号：18410240　代表：青野篤子）の助成を得て実施された研究の一部である。調査に協力していただいた保育所・幼稚園の先生方・職員の方，研究に協力していただいた社会心理学研究室の山川真理子さん，田辺弘尚さん他みなさんに記して感謝の意を表する。

青 野 篤 子

The hidden curriculum in the day care and childcare workers' consciousness toward them

Atsuko Aono

The purpose of this study was to research the hidden curriculum imbedded in the physical and human surroundings of nursing schools and kindergartens, and to clarify the childcare workers' consciousness about them. The result was as follows: 1) There were some gender differences in the colors and illustrations on clothes, material possessions, and name labels. 2) More importantly, there were some gender differences in the ways workers treated children and children interacted with each other, and some segregation by sex in the meetings. 3) Furthermore, there were gender differences in children's interests toward some activities and playing. 4) The childcare workers viewed these gender differences as rather rational or necessary. 5) Even if male childcare workers were employed, childcare of newborn babies was restricted to female workers. Therefore, it is held that we need more effective gender-free programs which could redress these implicit hidden curricula.
[keywords: gender free education, gender free childcare, hidden curriculum]